東日本大震災・原発事故　新聞はどう報道したか

―文・藤森教授が「人文科学研究所」公開講座で講演―

「東日本大震災・原発事故と報道」をテーマに人文科学研究所（所長＝小山利彦文学部教授）の公開講座が12月4日、100人が参加して開催された。講師は、藤森研文学部教授（元朝日新聞論説委員）。

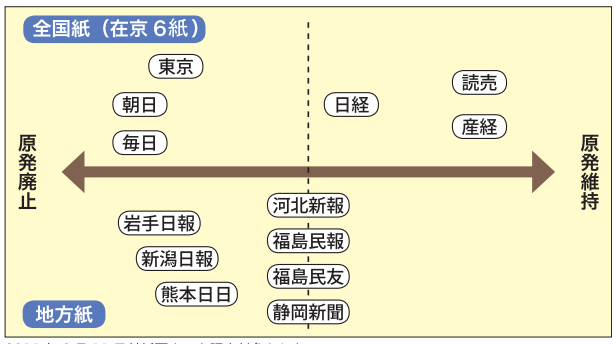
東日本大震災は、2万人もの死者・行方不明者と多くの被災者を出し、さらに過去に例のない原発事故も起きた。未曽有の広域・複合災害を新聞は、どのように報じ、どんな課題にぶつかったのか――。

藤森教授は、マスコミ倫理懇談会の依頼で、震災翌日の3月12日から3カ月間、全国紙（在京紙）6紙と被災県などの地方紙7紙の報道を調査。1面トップ、準トップ、第1社会面トップの記事を▽地震・津波の被害状況▽その復旧・復興など▽福島原発の爆発等と対応▽放射能の影響▽エネルギー政策▽政局▽その他のニュースなど11項目に分類、整理した。

そして、報道の内容とその時間的変化、各紙のその時間的変化、各紙の

▶ 講演する藤森教授

図　原発問題についての各紙社説の主張



2011年6月11日付紙面までを調査対象とした

紙は大きく扱ったが、被災地4紙は冷めていた。特に不信任案が否決された翌日の福島民報の社説では、「復興、原発そっちのけで政争に走り回る議員たちに多くの被災者は怒りをあらわにしている」と

学生らの調査・分析で各紙の違いも明らかに

提言にまで及んだ。

藤森教授の講演の一部を紹介すると……。

各新聞社は、今回の災害に対し臨時・特別態勢を組み、継続的に震災・津波、原発事故を報道した。地元紙は津波被災を手厚く報じたが、全国紙は原発報道を重視したのではないか―という声もあったが、全国紙はおしなべて両方をバランスよく取り上げていた。

報道量の差が出たのは菅直人首相（当時）退陣問題など政局報道。全国紙に、今後の新聞報道へのんど試みられなかった。

さまざまな要因があったものの、各紙の姿勢は「コンプライアンス（法令順守）ジャーナリズム」と批判されても仕方がない面がある。

また、「政府や東電と共に情報隠しをしている。大本営発表と同じ」という批判も聞かれたが、必ずしも当たっていない場合も多い。ただ、福島民友、河北新報、静岡新聞は、立場を明確にしない「中立」とした＝の検証報道を繰り返し進め、全容を明らかにすることは日本のメディアの世界への責任だ。エネルギー政策見直しへ議論の場をつくることも求められている。津波被災については、家族や家を失った人たちの生活、商工業、農漁業の再建などの課題を、息長くどう報道していくかが問われている」と結んだ。

◆調査対象紙

▽在京紙＝読売・朝日・毎日・日経・産経・東京　▽地方紙＝岩手日報・河北新報・福島民報・福島民友・新潟日報・静岡新聞・熊本日日

◆調査方法

各紙が「何を報じたか」を定量的に知るため、1面トップ、同準トップ、第1社会面トップの記事を対象にした。扱いの違いを加重的に見るため、それぞれ3、2、1ポイントを与えた。調査、分析は藤森教授と藤森ゼミナールの学生19人が担当した。

「新聞の信頼性感じた」「地方紙の独自性鮮明に」

調査担当の藤森ゼミ生に聞く

人文科学研究所の公開講座で藤森研文学部教授が報告した「東日本大震災・原発事故と報道」の新聞調査には藤森ゼミ生19人が参加した。うち4人（全員3年次）に、「新聞を読みこみ・比較する」ことによって感じたことを聞いた。

調査では、在京6紙と地方紙7紙の計13紙の紙面（3カ月分）を、「各面を読み、見出しを取り出し、内容をまとめた」（小田中悠紀さん）。膨大な資料と時間をかけて取り組み、カラオケルームまで利用して作り上げた「ゼミ生たちの汗の結晶」（藤森教授）だ。

▲ 藤森教授（右端）と小田中さん、本村さん、河合さん、横山さん（左から）＝生田キャンパスで

解説面を担当した河合彩花さんは「読んでいくうちに各紙の『押したいところ』が見えてきた。被災者目線か、マクロ目線かなどの違いがあった」。

地方紙の1面トップ・準トップ担当の本村茜さんも「新聞はどこも同じ、事実を伝えるだけと思っていたが、読み比べると各紙に違いがあるとわかった。特に岩手日報は『立ち上がろう　岩手』という見出しが躍り、復興を目指す紙面づくりを鮮明にしていたのが印象に残った」と話す。

横山みなみさん（木村さんと同じ担当）は「原発記事に関しては、当該地方紙の役割を感じた」という。

また、「ニュースはネットでも読めるが、信頼性の点では新聞が一番。そのことを改めて知った」（本村さん）とも。

学生たちは、膨大かつ詳細な調査活動で新聞に対する見方が変わり、ほかのメディアとの違いを実感していた。

独フランクフルト大生とネット授業

海外での日本文学・文化受容を再認識

文・板坂ゼミ生

文学部日本文学文化学科は、アジア、ヨーロッパ、アメリカの大学とネット会議システムで結び、日本文学・文化研究に取り組む海外の教員による遠隔授業、海外の大学生との共同授業を行っている。

このネット授業は、海外の人たちが日本の文学・文化をどうとらえているかを知る絶好の機会になっている。

12月13日は、板坂則子ゼミ生30人とドイツのフランクフルト大学で日本学を学ぶ学生40人（指導＝ギドー・ボルデリンク准教授）が、8時間の時差を越え、ドイツと生田キャンパスを結んで共同授業を行った。テーマは「不思議…奇談」。

日本時間午後4時15分は、フランクフルトでは午前8時15分。「おはようございます」「グーテンモルゲン」で始まった授業は、日本側・板坂教授、ドイツ側・ボルデリンク准教授が進行役となった。

▶ ネットを通じ質問する板坂ゼミ生

◀ フランクフルト大の様子

あらかじめ作ったコンテンツ（板坂ゼミ側が『ピノキオ』と『春雨物語』より「二世の縁」。フランクフルト大側は「ファイナルファンタジー」と『百物語』）をテーマにし、交互に発表。活発な質疑応答が行われ、1時間30分の授業を無事に終了した。

共同授業を終えた3年次生に話を聞いた。「フランクフルト大の学生は日本語を学んで1、2年なのに、積極的に話してくれた。感激です」（児野良子さん）▽「できるだけ分かりやすいコンテンツを作った」（吉川綾香さん）▽「ドイツの学生たちは、日本語が本当に上手です。こちらもいい刺激を受けています」（木村真暢さん）▽「和気あいあいで進んだ。こういった授業は楽しくやらないと続かない。いい雰囲気だった」（内沢隆志さん＝ゼミ長）。

――など、刺激的で、充実した授業の様子が伝わってきた。

「笑顔」「涙」……一瞬の表情切り取る

海外NGO参加学生の写真展開く

昨夏、NGO活動中に撮影した学生の写真展が1月13日から24日まで、生田キャンパスのアトリウムで開催された。

経済学部国際経済学科の「NGO論」（狐崎知己教授）を受講し、タンザニア、メキシコ、インド、インドネシアでのスタディーツアーに参加した学生13人の10作品。現地で出会った人々の姿や一瞬の表情を切り取った。

▲ 力作を前に狐崎教授と学生たち

タンザニアでフェアトレード・コーヒーについてのリサーチ活動をした栗島早紀さん（経済2）は、下校中の小学生をカメラで追った。「子どもたちに話しかけたら、恥ずかしがって一斉に走り出したところを、シャッターを切りました。よく見るとピントが少しずれていたり、手ブレがあるのですが、大事なのは子どもたちの姿をとらえることだと思いました」。

同じくタンザニアで活動した佐藤未来さん（同）は「学校で言葉を勉強する小学生たちを、彼らと同じ視線で撮影しました」。

インドネシアのフローレス島の海辺で出会った村の人々の笑顔を写し出した古川裕美さん（同）。「カメラを向けたらたくさんの人たちが寄ってきました。『私たちの島を写真で知らせて』って…」。

「金賞作品」を受賞したのは、メキシコ市でストリートチルドレンの支援活動を体験した鈴木千里さん（同）。つらい過去を語るシングルマザーの瞳に宿った「涙」をとらえた。

狐崎教授は「作品はどれも素晴らしく、被写体との〝距離〟が近いことが分かる」とたたえた。

写真展は、今後、オープンキャンパスなどで随時開催する予定。

「NGO論」は途上国の人々の立場に立った効果的な国際協力の在り方を考える専門科目。スタディーツアーには大学から補助金が支給される。